W. I. タマスの社会学

―その学説史的検討―

國　歳　眞　臣

序

ウイリアム・I・タマス (William Isacc Thomas) は，アメリカ中期社会学者のなかでも最も重要な学者の一人と考えられている。大道博士は，アメリカ社会学史の節にあたるものとして，次の三点を指摘している。

(1) 1865年のアメリカ社会科学協会 American Social Science Association の設立。

(2) 1895年のアメリカ社会学雑誌 American Journal of Sociology の創刊と 1905年のアメリカ社会学会 American Sociological Society の成立。

(3) 1918年のタマスおよびF・ズナニエッキの「欧米におけるポーランド農民」5巻 (The Polish Peasant in Europe and America, 5vols, 1918～1920) の第一巻の出版，

そして特に，1918年の「ポーランド農民」の出版が，アメリカを「社会学の王国」に形成させる契機となったとし，その重要性を強調してる。(1) 更に，N・ハウスは，アメリカ社会学史を二大時期に分割し，第一期を1883年におけるウオード L・F・Ward の「動的社会学」(Dynamic Sociology) の出版から 1918年における「ポーランド農民」の出版までとなし，第二期を 1918年より現在に至るまでと述べている。(2) このような分割の是非の論議はともかくとして，現在のアメリカ社会学が，1918年以後における社会学をその主流となし，その線にそって多くの派生的諸結果を展開したものとみることは不当ではないであろう。特に，現代社会学がすぐれて経験科学でならぬとする現代的要請を耳にする時，アメリカにおける実証的研究の端緒ともいえる「ポーランド農民」によって一時期を画したタマスのアメリカ社会学において占める位置の重要さは明確である。しかるに，今日までわが国においては，佐々木徹郎氏をのぞいては，タマスについての検討がなされていない。(3)

私は，タマスのアメリカ社会学史における位置の重要さを考えるとき，彼の理論について検討することは極めて重要であると思う。佐々木氏も指摘するごとく，タマスを明かにしなくてはアメリカ社会学の特色の一つをなす実証的傾向は，はっきり把握出来ないと考える。

〔注〕

(1) 大道安次郎「アメリカ社会学の潮流」

(2) F•N•House "The Development of Sociology" P294

(3) 佐々木徹郎氏のタマス研究としては，次のものがあげられる。
「社会における客観的過程の研究」文化第16巻，PP 469～485，昭和26年 9 月
「四つの願望理論について」社会学研究，第6巻，pp 16～24，昭和27年12月
「ウィリアム・タマスの社会学の進展」社会学評論，第8号，pp103～119，1952年
「ウィリアム・タマスの社会学方法論」社会学研究，第4号，pp 11～25

Ⅰ．タマス社会学の展開

タマスは，1947年バークレーで死去するまでに6巻の書物と20以上の論文を書いている。しかし，彼の考えを体系的にまとめた決定的，かつ綜合的論文は見られない。彼はそれらを大学の講義に限定し，刊行しなかった。それ故に，彼の理論的体系はその作品から再構成されなければならない。これはたやすいことではない。というのは，彼の見解の多くは，ティマシエフが指摘する如く，しばしば変化したからである。

「タマスは，新しい考えが科学的水平線上に現われると，決してそれらのどれにも心を奪われることはなかったが，必らずそれらに応答した。例えば，一時，彼は精神分析学にとらわれた。しかしその後，フロイド派の公式も誤りがあるとして拒否した…。(1)」

かくの如く，タマスは新しい学説に対して敏感であった。しかし彼自身が究明しようとした問題は，常に人間の行動の分析にあった。そのことは，彼の最初の論文「民族心理学の範囲と方法」(Scope and Method of Folk Psychology, 1896) が未開社会，更に人間行動一般の研究の出発点をなすものであり，彼の最後の論文「原始人の行動」(Primitive Behavior, 1937) が，人間行動の分析に関する種々のアプローチについての反省および思考の結果であることによっても明白である。それゆえ，彼の理論体系にみられる変化は，人間行動分析の手段概念の変化であるといえる。たとえば，彼の初期の中心概念であった「願望」概念が，後には「状況」概念へと変化をとげている。しかし一応，彼の人間行動分析に関する基本的立場の本質的特徴は次の七点にしぼることが出来る。

(1) 社会科学の目標は，人間行動について検証出来る一般化を得ることである。
(2) 人間行動は何らかの条件の下でのみ起きる。そしてそれは抽象的には「状況」の概念によって表われる。
(3) 人間の状況は，物理的環境，相関的社会規範，他人の行動といった観察者にも行為者にも共通な幾つかの要因を，しばしば含む。これは，社会科学は状況の観察可能な，または客観的局面についての直接の記述を必要とすることを意味している。
(4) 人間の状況はまた行為者のためにのみ存在する幾つかの要因を含む。たとえば，いかに彼等は状況を知覚するか，それが彼等に何を意味するか，彼等の「状況の規定」は何か。このことは，人間行動の主観的局面は客観的局面と同じ位多く研究者によって把握されなければならな

いことを意味する。その上に主観的なものは，これら諸要因の考えに帰するべく対照されたものとして理解されねばならない。

(5) それゆえに，社会科学の方法は人間行動の客観的かつ主観的局面の両方の体系的分析を準備しなければならない。

(6) そのような方法論は，生活史のごとき資料を得るという特別な技術を含むので全社会科学の助けを必要とする。

(7) このアプローチの社会目標は，行動の合理的コントロールのために必要かつ有用な種類の知識を利用出来るものにすることである。[2]

要するにタマスの体系は，もし実証的かつ究極的に有用な社会科学が実現されるとするならば，何が研究されねばならないか，そしていかに，ということに関するものである。

かくして，彼の社会学概念には変動はあったけれども，一応次の四段階に区分が可能である。第一期は，1896年の「民族心理学の範囲と方法」から 1907年の「性と社会」(Sex And Society) の出版まで，第二期はそれ以来，1909年の「社会的起源のための素材」(Source Book for Social Origins)の出版まで。第三期はそれ以後，1927年のアメリカ社会学会就任迄，第四期は就任後死去するまでである。

第一期は，タマス自身が述べている如く，スペンサーおよびドイツ民族心理学の影響が強い時期で，[3] 彼の思想には生物学的，本能説的特徴が強い。ただ「性と社会」においては生理学的説明が見当らず，徐々に変化していることを示している。

第二期には，本能より習慣および学習を重視する見解に移行している。特にこの期の代表的著書「社会的起源のための素材」において，タマスは統制 Control，注意 attention，危機 crisis，習慣 habit 等の概念を形成した。すなわち，彼は，進化は「危機」から起因するという理論を発展させた。[4] 彼によれば，「危機」とは状況における何かが習慣の再適応 re-adjustment を要求することにすぎない。そして，それは古い習慣がもはや通用しない時に起きる。すなわち，習慣の中絶または混乱である。しかも「危機」は必ずしも激烈なまた極端なものであることは必要としない。「もちろん危機は有機体を殺したり，集団を破壊するほど重大であるかもしれないし，また失敗や悪化の原因になるかもしれない。しかし私がその言葉を使う時には，危機は常に激烈なものとしてみなされるべきではない。それは単に習慣の混乱 disturbance of habit にすぎない。そしてそれは刺激，暗示にすぎないかもしれない。」[5]

危機はまた，それに直面する人々の側に自動的反応を導くような，一定の客観的存在をもつものとして考えられるべきではなない。外的観察者にとっては危機であるように見えるものが，当事者によって気づかれずにすぎることもあり，逆に，ある者にとって無害のように見えるものが，他の人にとっては重要な意味深さを持つこともある。かくして，「同じ危機が一様に，同じ結果を生み出すとはいえない。」[6]

危機の重要性は，それが生活組織の基礎的原理をつくり出すという事実にある。そしてパーソナルな環境や社会的環境において，危機は古い習慣を動揺させ，新しい反応をひき起し，新しい発達を企図することにおいて主要な要因となるところの「触媒」[7] である。

またフォアカートは，タマスの「危機」の原理がトインビーA・Toynbeeの「衝撃と反応」の定立[8] に非常に似ていること，更に，パーソナリティ無秩序における外傷体験の重要性上についての精神分析学者の強調に似ていることを指摘している。そしてこれら三つの思考ラインの輻合が，批判的状況における人々についてのより内包的な研究の価値あることを暗示していると述べている。[9]

かくしてタマスは種々の民族の意識の比較研究の重要性を指摘した。この書物においてタマスが主張したのは次の三点である。

(1) 人間の歴史を理解するには原始社会を研究することが必要である。

(2) 原始未開社会の研究のためには神話，迷信，魔術的行為の研究が必要である。

(3) 社会過程は，タルドの模倣，デュルケームの拘束，ギディングスの同類意識の如き単一のもので解釈さるべきではない。社会過程は，このような社会力の全てまたはそれ以上をも含むのである。

これら三点の内，第三点にタマスの社会学体系のうちもっとも重要な社会現象についての彼の概念が見出される。この点は，社会学のパイオニアによってとられたものとはかなり異っているが故に重要である。すなわち，彼は，ギディングス，デュルケームのごとき「特定選択的」な社会資料の解釈に反対し，彼等の見解は人間行動や人間体験の実証的概念を示しえないと主張した。

次に，第三期においてタマスは人間文書 Human document を資料とする社会調査の方法を展開している。その代表的研究が「欧米におけるポーランド農民」と願望理論を完成した「不適応少女」である。この二冊の書物に，タマス社会学の方法論を代表するものがほとんど示されているといっても過言ではあるまい。これについては次章で検討する。

第四期において，タマスは統計的，量化的方法を無視することは誤りであると考えるようになった。そして，この期の最大の特徴は，厳密な社会法則を見つけることの可能性に自信をなくし，晩年には，彼は，社会学における法則は蓋然的なものであると考えた点にある。そのために彼は，近代統計学の影響によって，総合状態が複雑であるときには相互関係が多くなり，その測定が必要であると気づくと法則に確率の目標 goal of probability を代用するようになった。[10]

以上のようにタマスの社会学は，四段階の展開をとげているが，その背後には種々の学者の影響があったからである。[11] 特に，スペンサー，デューイ，サムナー，ボアズ，ワトソン，G・H，ミード，クーリー，ズナニエツキ，ドロシータマス，フロイド，タルド等の影響が大きかったようである。また同時に，タマスが与えた影響も非常に大きい。例えば，彼が導いた「態度の概念」は未だアメリカ社会心理学概念の主流を占めており，また「四つの願望理論」もボガーダスその他に非

常な大きな影響を与えた，更に，現代アメリカ社会学の代表的理論家の一人であるパーソンズT-Parsons にも大きく影響している。すなわち，タマスの「状況の規定」概念は，マートンによって，ニュートンの定理にも比すべきものと評価され，(12) 更にパースンズが行為の一般理論を建設するにあたって，その中心的考え方として措定した社会体系の構造機能分析の思想には，タマスのこの考えが大きく影響を与えている。(13)

またいわゆるシカゴ派といわれる社会学者の大部分は，タマスによって直接的に教育を受けたものである。かくのごとく，タマスは特に社会学者の養成においてもアメリカ社会学に大きな貢献をなした。ロバート・パークを社会学者にし，ズナニエッキをアメリカに招き，フェアリス，L・L・バーナード，K・ヤング，E・ボカーダス等の優秀な社会学者を養成したのもタマスである。1931年，彼の門弟達によって編まれた論文集（K・Young(ed)"Social Attitude", 1931）がタマスに捧呈された。

〔注〕

(1) N•S Timasheff "Sociological Theory its nature and growth" p148

(2) Edmund H• Volkart, "Social Behavior and Personality, Contribution of W• I• Thomas to Theory and Social Research" p2

(3) H•Blumer, "Critigues Research in tho Social Sciences:I. An Appraisal of Thomas and Znaniechi's ThePolish Peasant in Europe and America" p133「私はドイツ留学中，dazarus や Steinthal によって代表されたドイツ民族心理学に興味をもった。そして私はまた，Spencer の社会学によって強く印象づけられた。」と述べている。

(4) W•I•Thomas, "Source Book for Social Origins" p18

(5) Ibid.

(6) Ibid.

(7) E•H• VolKart, Ibid., p13

(8) "Challenge and Response" は，一つの文明が他の文明と接触する形式についてトインビーが指摘した理論である。トインビーによれば，ある文明がより強力な他所の文明の影響に接した場合に，これを受け入れこれに順応するか，またはそれまでの伝統的な生活様式を固執してこれに徹底的に反撥するか，二つの内の一つしかなくて，順応すればその文明は存続し，反撥すれば滅亡する他ないという。

(9) E•H•Volkart, Ibid., p13

(10) N•S•Timascheff, Ibid., p148

(11) タマスのアメリカ社会学史における位置づけについての詳細な検討は，修士論文「タマス研究」(1966年，関西学院大学院）にて行なったので省略する。

(12) Robert K•Merton,"Social Theory and Social Structure" p179

(13) Talcott Parsons, "Essays in Sociological Theory" pp58～59

I、四つの願望理論

1. 四つのオリジナルな公式化

タマスの社会学概念の内で，最も知られているのは「四つの願望」論である。これは単に有名で

あるのみならず，アメリカ社会学に大きな影響を及ぼしたといえる。[1]　しかし，この章においては，この理論の果した役割よりもむしろその現代的意義，特にその現実分析上の意味を考察することにする。

タマスが願望を最初に問題としたのは，1917年の「第一次集団規範の持続性」(The Persistence of Primary Group Norms) においてである。しかし，この理論の源泉は既にそれ以前の彼の論文に見出すことが出来る。すなわち，1907年の「性と社会」においてタマスは人間の行動の原動力を性と食物に見出しており，また狩猟本能について考察し，「新しい経験への欲求」と全く同じ例を挙げて説明している。更に，この書物の以前に書かれた「狩猟本能」(The Gaming Instinct, 1901) においても，彼は戦争，決闘，競争，科学的探究，産業角遂その他の社会現象を，性と食物とに起源をもつ狩猟本能によって説明している。結局，このことは，タマスが人間行動の原動力としてあくまでも食物と性にもとづくある種の本能的なものを初期には考えていたことを示している。そして，この本能論を廃棄し，これに代るものとして提示されたのが「願望論」であるといえる。

先づ「第一次集団規範の持続性」においてタマスは，人間組織の潜在能力と要求を行動に結びつけるべく，「媒介変数」の図式をうち立てんとした。その基礎に置いているものは食物と性への欲求と，当時彼が影響されていたワトソンから引き出した「オリジナルな情緒的反作用」の概念――それは「恐怖」，「激怒」，「喜び」または「愛」として概念化される――である。換言すれば，この時期のタマスの願望は有機体に結びつけられているといえる。その上それは欲求やオリジナルな情緒的反作用の所産物として考えられている。ここで注目すべきことは，彼はすでに四つの願望を提示しているが，彼の関心にあったのは「新しい経験への欲求」と「支配への欲求」の二つであったことである。

タマスによれば，ワトソンが幼児の感情を怒りに結びついたもの，恐れに結びついたもの，喜びに結びついたものの三類型化をはかったことにヒントを得て，移民集団における人間の行動を，新しい経験への欲求に結びつくもの，支配への欲求に結びつくもの，認知への欲求に結びつくもの，安全への欲求に結びつくものの四つの基礎的な願望を表わすものとされている。そしてその考えの基底に食物および性への欲求を置いている。

「もちろん行動のあらゆる形式は，遂には二つの基礎的な欲求，すなわち食物への渇望と性の渇望にまとめられることを認識する必要がある。食物への渇望は種族の生命を維持するのに必要である。」[2]

先づ支配的な関心は追求関心であり，その心的型相は本質的には狩猟形相 hunting pattern または追求型相 pursuit pattern であるとし，人間の結婚または追求および捕獲の過程であるとみている。そして，動物または人間の狩猟活動と創造的人間の科学的活動が奇妙にも似ているとし，「我々にとって関心の特質は，もしそれが追求型相に続かないならば，いかなる行為も興味を引か

ない。」[3]　としている。その典型的例として科学者が物を発見する場合を挙げている。しかも，タマスは，この追求関心こそ新しい経験への欲求と支配への欲求のあらわれだとみる。すなわち，彼はこの追求の初期の段階またはその一般的予備の条件を，好気心 Curiosity と呼び，この好気心が観念上新しい経験への欲求となるとしている。また，支配への欲求は怒の副次的現象の一つである。

以上の転回からも明らかなごとく，タマスが当時学界を支配していた本能論に影響されたことは明白である。彼は後には本能論を，「ある種の魔術で相互作用している心理的実体の華麗なる星座」とよび，人間行動説明の鍵としては不充分であると考えるに至ったが，[4]　本能的なもので人間行動を説明しようとする基本的態度は，そのまま「四つの願望」理論にうけつがれていったとみることが出来る。

2.　「ポーランド農民」における四つの願望

タマスは，「ポーランド農民」において四つの欲求を，適当な社会的価値の通用をとおして，新しく欲する態度の形成に利用しうる基本的な態度として提出している。この基本的な態度は，全ての人間に存在しており，かつ，なんらかのかたちでその充足を必要とするから，人間はそれによって常に動かされもし，もてあそばされもするわけである。

「各人は社会の一員であることによってのみ満足させることのできる多様な願望 Wishes をもっている。一般的願望の型のうちから，われわれは次のものを抽出できるであろう。

(1)　新しい経験への欲求 the desire for new experience

すなわち新鮮な刺激を求める欲求

(2)　承認への欲求 the desire for recognition

このうちには，たとえば性的反応や一般的社会的評価，また，装飾物の展示から科学的研究の達成による価値の証明に至るまでのものが含まれる。

(3)　支配の欲求 the desire for mastery

これは所有，家庭内での暴君，政治的専制によって例示される。この欲求は嫌悪の本能にもとづいてはいるが，賞讃に価する大望に晶化されうるものである。

(4)　安全への欲求 the desire for security

恐怖の本能にもとづいており，不断の孤立状態の下や社会的タブーの状態による個人の悲惨なことによって，消極的に例示される。」[5]

ここに挙げられている欲求の種類は後の理論とは全く同じではない。これは「方法論的覚書」に書かれたものだが，一年後に発行された第三巻においては少し変化している。すなわち，タマスは第3巻において，気質 temperament と性格 character との区別を強調して，[6]　若干の変更を示している。

「(1)気質的なもの

① 新しい経験への欲求，これは好気心の本能に基づく

② 安全への欲求，これは恐怖の本能に基づく。

(2) 性格的なもの――態度，したがって社会的環境の力から生ずる。

③ 応答への欲求，すなわち，親密，友情，愛への欲求。

④ 承認への欲求，すなわち，優れた身分，賞讃，社会的地位に対する欲求。」[7]

この後者の分類が体系化されたのが「不適応少女」における願望理論である。ただ一つ言えることは，「ポーランド農民」においては，「四つの願望」概念が人間行動の分析にほとんど指導的な役割を果していないということである。「ポーランド農民」においては，タマスは，「態度」，「価値」，[8]「生活組織」等の概念に焦点を置いているのに反し，「願望」は，ただ移民者の一人のポーランド農民の自叙伝の分析に使用されているにすぎない。

3. 「不適応少女」における四つの願望

タマスが「四つの願望」を体系化したのは「不適応少女」においてである。彼はこの書においても，新聞に掲載された手紙，少女保護機関の手紙少女の自叙伝，社会福祉事務所の記録等の人間文書を分析している。この書物における分析は非常に興味深いものであるが，佐々木氏も述べているごとく，余りにもはっきり割切っており，かえって疑わしい感じさえうける。[9]

「人間の願望は非常に多くの具体的形態をもつ。しかし次のように一般に分類が可能である。

(1) 新しい経験への欲求

(2) 安全への欲求

(3) 応答を求める欲求

(4) 承認を求める欲求」[10]

これらを簡単にまとめると次のようになる。

「新しい経験への欲求」は，狩猟本能と同じ内容を持っている。この欲求は，新しい刺激を求め実験を行う気持であって，追跡 pursuit，逃避 flight，捕獲 capture，死の冒険等の行動に表現される。この欲求は，原始時代には狩獲に表現されたが，すべてのスポーツ，ゲーム，サイコロ投げ，種々の賭け事もこの欲求に基づく表現である。人間はこれらの行動において，成功のスリルと失敗の悲哀をあじわうのである。タマスによると，この欲求は二つの方向に表現される。第一は社会的価値の創造を促進する方向である。これに対して，盗賊，売春婦，等にみられるのは，この欲求の反社会的表現である[11]。

「安全への欲求」は，新しい経験への欲求とは正反対であって，新しい経験への欲求が感情的に怒りに結びつけられていたのに対して，恐怖にもとづいている。死を避ける傾向として憶病とか回避に表現される。この欲求に支配される人のパースナリティ類型は，「ペリシテ人型」である。それゆえ，この欲求に支配されている人は，慎重，保守的で，規則正しく組織立った仕事を行い，財

産を蓄積する傾向がある。(12)

これまでに述べた二つの欲求は，食物の追求と死の回避の本能に密接に関係していた。そしてそれらは恐怖と怒りの感情に結びつけられていた。一方，応答を求める欲求は，第一義的には，愛の本能にもとづいている。この欲求は他人の評価を求めまたは与える傾向である。この第一の表現は，ワトソンやソーンダイクの研究に示されるごとき子に対する母の献身と，子のそれに対する反応である。また両性間の愛へのこの欲求は非常に強い。(13) タマスは，この欲求が社会的交渉の基礎になるとしている。

「一般に，応答への欲求は，諸願望のうちで最も社会的なものである。これは性的な要素と群居的な要素 gregarious element の両方を含んでいる。これは利己的要求を行うが，他方において利他主義の主要源泉でもある。子供，家族に対する献身も，大義，原理，理想に身をささげることも，適用の分野は異るが，同一の態度である。献身や自己犠牲は，他の諸願望からも生じるかもしれないし，また直ちにそれらの全てと結びつくことは真実である。」(14)

「承認を求める欲求」は，「ポーランド農民」においては「支配の欲求」としても表現されていた。この願望は，一般に，認められ，羨望され，利益のある社会的地位を得んとしてなされる社会集団における地位のための斗争に表現される。タマスは，この欲求の重要性を次のごとく指摘する。

「個人および社会にとって，承認および地位の重要性はきわめて大きい。個人はそれを欲するのみならず，パースナリティの発展のために必要とする。これが得られないこと，および永久に得られないという危惧は，フロイド主義者が，その起源が性的なものとしている心理病理的障害の主要原因をなすであろう。」(15)

この欲求は，虚栄，野心，名声に表現されるが，その心理的基礎には種々のものがある。すなわち，この欲求は，外的行動としては支配的，圧制的，サディズス的に表現されてはいても，その底には，分泌腺的衝動および怒りの本能から派出していることもあろうし，あるいは劣等感，不適応，社会的無視等恐怖に近い感情から発して，その補償のために強い承認を求めることもある。

以上簡単にまとめてみたが，これがタマスの「四つの願望」理論の決定的なものといえる。そこで「ポーランド農民」のそれと比較してみると次のような相違がみられる。第一に，「ポーランド農民」においては，タマスは欲求を，人間を社会化する力，個人をして社会集団に加入させる力として考えていた。これに対して，「不適応少女」においては，適切な指導がない場合には，欲求は個人および社会を破壊する力として考えられている。ここには精神分析学の影響がかなりあったことを示していると思う。第二には，「ポーランド農民」においては，欲求の基礎には本能のみしか考えられていなかったのに，「不適応少女」においては，神経的メカニズムが考えられていることである。第三には，「ポーランド農民」においては，社会構成の原動力とも考えられていた願望が，「不適応少女」においては，タマスは，欲求を個々の人間行動の原動力として考え，人間行動

のダイナミックスの分析に主導的役割を与えている点である。佐々木氏もこの点を最も重大な変化とみている。(16)

4.　「四つの願望理論」とフロイド

タマスの「願望理論」を一見すれば，フロイドの精神分析学との類似に気がつく。たとえば，K・ヤングは次のごとく指摘する。

「やがてタマスの思想は第二段階に到達した。すなわち，それは，彼が欲望に関するフロイドの所説に手がかりを得，しかしてそれを，彼が自己の豊富な経験をしるべに移民団体，ニグロ及び都鄙の中心の社会生活について観察した如く，社会的行動の諸般の動機を包含するまでに拡充したのにはじまる。(17)」

しかし，タマス自らはこの点を否定している。すなわち，1938年の会議において，「私がフロイドから願望の考えを引き出したと想定する社会学者がいる。しかし私は1905年頃に願望という言葉を用いており，しかも当時私は，フロイドの名前も知らなかった。」(18)　とはっきり言明している。たしかに，1905年頃の論文や書物には，彼の願望型論と同じ説明による本能的なものについての叙述が見られる。しかし，それはやはり願望ではないことも明白である。佐々木氏もその点を重視して，「人間の行動の底に潜む本能的，衝動的なものは本能という固定した形を与えられずに残っており，これがタマスの場合，フロイド主義の考え方と結合して，四つの願望説に発展する。」(19)と結論している。さらに，「ポーランド農民」の共著者であったズナニエッキも，フロイドの影響が四つの願望理論には強く働いていることを指摘している。(20)

フロイド Sigmund Freud（1856～1939）がアメリカに紹介されたのは 1909年，クラーク大学創立20年祭に，スタンレイ＝ホール Gramille Stanley Hall によって招待されて以来のことである。その際フロイドは，各大学で講義を行い，それがアメリカ心理学雑誌に掲載されたという。また当時，多くの新フロイド主義者とよばれる学者がドイツからアメリカに来任した。そして，フロイドの著作はアメリカにおいて多数の共鳴者を獲得し，社会科学者に幾多の新概念を提供した。そのフロイドに共鳴した一人にホルト E・B・Holt がいる。彼は 1915年に，「フロイド的欲望説」(The Freudian Wish and Its Place in Ethics) を発行した。そして，タマスが「ポーランド農民」を提出したのが 1918年である。この一致は偶然であるだろうか。私は偶然ではないと思う。タマスがホルトの書物を読んでおり，彼自身それによって深く印象づけられたことはたしかである。それがタマスの共同研究者であるズナニエッキにはよく分ったのであろう。更にこの点を証明するものとして，K・ヤングはホルトの樹立した全学的体系には，欲望及び態度に関するタマス的使用法と一脈相通ずるものがあることを指摘している。

「ホルトはフロイドの用語を大部分棄てたけれども，しかし欲望に関する動的見解はこれを固持して，　如何にそれが現代心理学に対し価値ある説明原理として役立ち得たかを指摘した。……

ホルトによれば，欲望とは『ある種の肉体的規制が，現実に実行する否とを問わず，実践にうつろうとする行動過程』といったような純客観的概念として思惟せらるべきであって，それは『動因としての態度』に依存する。かくて欲望は如何なる特殊的反応体系とでも結合し，かの正統的フロイド学者が考えるように，単に唯一の反応体系とのみ結合するものではない。……彼の樹立せる全学的体系には，欲望及び態度に関するタマス的使用法と一脈相通ずるものがある。」(21)

考えてみるに，タマスは，もともとは，フロイドとは独立に願望理論を考え出したのであるが，後には，フロイドに大きく影響されたことは事実であるだろう。それ故に，タマス自身，「不適応少女」においては，ヒーリーの心的葛藤の理論を，「妨げられた願望実現」の観念に結合することによって少女間の非行を説明し，承認への願望の不満足が，フロイドが性的衝動のフラストレーションに帰したのと同じ心的状態を引き出すと結論づけている。

またフロイドの考え方との類似している点としては，タマスが四つの願望理論を，人間行動，特にアブノーマルな行動の分析の手段として有効であることを提示している点があげられる。しかし，フロイドとタマスは，一点で大きく相違している。それは，佐々木氏も指摘するごとく，フロイドは個人のパースナリティ分析に主眼を置いたのに対し，タマスは，願望理論を個人と社会との相互関係の分析に利用している点である。この点から，バージェスはタマスの理論を「社会分析」とよび，フロイドの精神分析と対比させている。(22) そして，この対比こそが社会学者タマスと精神分析学者フロイドの明白な区別を示しているといえる。

5. 四つの願望理論の意義(23)

先づ，第一に，この理論は，人間のすべての行動は欲求に動機づけられているということを前提としている。すなわち，タマスは人間の行動様式がノーマルであるか，アブノーマルであるかということを，この四つの欲求全てが適切に満足されているかによって見ようとした。ここから，この理論がアブノーマルな行動の分析により有力な手がかりを与える点を指摘出来る。しかし，四つの願望理論のもつより重要な点は，佐々木氏が指摘するごとく，四つの願望理論が個人と社会との関係を考察できる点である。

「人間行動の問題は社会的にみとめられた様式で，欲求を満足するために，社会的価値に対して適応した態度をとることにある。もし人間が，社会的規定を無視して欲求を満足しようとする場合，また社会が，欲求不満に対して適当な補償を与えないで，個人の欲求満足を否定する場合に人格の分解が生ずるのである。第一の場合は，社会的にみとめられない価値に個人が指向する場合であり，第二の場合は，社会的価値が欲求を満足するに，不適当な場合である。」(24)

このように考えると，この理論によって，個人の行動と社会の規制との関係が明らかになる。ここから，彼の社会および個人の解体論と願望論の関係が出てくる。

タマスは，社会解体と個人の解体とは別個の事柄であることを主張し，個人解体の例をば，法廷

記録，福祉事務所の記録，自叙伝等の人間文書を利用し，これを「四つの願望」その他の概念で分析している。その成果が「不適応少女」である。彼によると，人間には社会生活によってのみ満足させられうる四つの欲求がある。個人はこれらの欲求にもとづいて社会生活を営むのである。しかも，これらの欲求は，適切な社会的規制の枠内で満足されない場合には反社会的行動をもたらす。「不適応少女」とは，欲求の社会的に規制された方法による満足が不可能であるが故に，その満足のため反社会的行動に陥入った少女であるとタマスはみる。このように，彼は反社会的傾向としての個人と，それを統制せんとする社会の対立を中心に考える。この個人の自然的傾向，欲求，衝動と社会統制との関係として反社会的行動を分析せんとする立場は，アメリカの社会学では有力な一派をなしている。その例として，佐々木氏はパークの「マージナル・マン」の概念，バージェスの都市頽廃地帯の理論等をあげている。[25] またブロッホ Herbert A. Bloch も，情緒的緊張の種々な形式がタマスの願望論に，すなわちフラストレイテングな情緒的状態が願望型相に関係されるものとして，具体化されるとし，ヒーリーとブローナーの非行行動の取り扱いとタマスの願望理論とを相関させて，「非行行動と共に起きる情緒的状態」というダイアグラムを提出している。[26]

以上の如く，タマスの願望論のもつ理論的意味は，二点，すなわち，個人と社会の関係を理解するための社会分析に有益な点と，人間行動を規定する点を主要なものとしてみのがすことが出来ないであろう。しかし，タマスの願望理論には多くの批判もなされた。

先づ第一にあげられるのが，タマスの願望理論の包括性についてである。たとえば，ボガーダスは，四つの欲求は人間の全ての欲求を包含していないことを指摘し，「他人を助ける欲求」，「自由への欲求」，「公平に正しく他人から処遇されたいという欲求」の三つを追加すべく述べている。しかし，この批判はタマスの願望概念に，ある場合には含まれており，ある場合には分類の基準が異っている点から不適切である。それ故，もしタマスの四つの願望が正しいとするならば，いたずらに欲求の種類を増すことは，人間行動分析のための各欲求をあらゆるものについて全てあげなければならないことになり，願望概念の操作手段としての役割を否定することになると思う。

次に，願望概念の有用性についての批判である。たとえば，エルウッドは，願望または欲求は常に本能的傾向，習慣，知能の複合体ゆえ状況の心理的分析を完成することは出来ないと指摘する。しかし，佐々木氏も反論しているごとく，タマスの願望は社会力にも似た概念であって，人間の社会的行動分析のあくまでも手段であって，社会的行動の動機づけの分析にあたっては，本能，習慣，知能にまで分析することは不必要であると思う。[27]

第三の批判は，タマスの願望論には客観性が欠如しているというものである。この批判をなす人としては佐々木徹郎，フォアカートなどがあげられる。佐々木氏は「願望理論について，われわれは，その人間行動解釈が，果して妥当かどうかと判断する客観的基準をもっていない。」[28] と批判する。たしかに，この批判は間違っていないと思う。しかし，私は記述の基準があればよいのであって，その実用的であるという面を強調したい。

私がタマスの願望理論の最大の欠点として指摘したいのは，記述の形式が決っていないという点である。すなわち，願望の夫々の中味を，いかなる形で整理されたかをタマスが述べていないということである。ここにタマスの願望概念のあいまいさがあると思う。それゆえ，このあいまいさを失くすためには，「行動発現形式のカテゴリー」[29] として利用することで足りると思う。換言すれば，この願望理論が記述調査の使用にとって便利である点に現代的意義があることになる。

そこで，四つの願望を発現形式としてみてみると次のようになる。先づ「新しい経験への欲求」は，行動発現形式としては active なものを示す。次に，「安全への欲求」は passive な行動発現形式である。第三の「反応への欲求」は introjcct ないしは absorb な発現形式である。最後に，「承認への欲求」は project な行動発現形式である。結局，人間の行動を現実に分析する場合には，以上の四つの形式に分けて考えれば，非常に便利である。それゆえ，この願望論の現代社会学における意義は，社会的行動の分析にとって形式的な分析の意味を担っている点にあるといえる。

最後に，この「四つの願望理論」の社会学史的な意味をみてみると，次の三点があげられる。

1. 本能論から学習理論へと発展させた点
2. 形式社会学とも明確につながる点
3. 文化社会学への足がかりとしての点

この内で，もっとも学史的にみて，重要な点は，文化社会学への足がかりとしてのきっかけが，願望理論の有用性への疑問から出てきていると思える点である。「人間の一つの社会的，文化的現象が人間のただ一つの欲求だけに必然的に対応しえない」が故に，タマス自身も後に願望理論に重点をおかないで，文化接触および文化伝播の現象を中心においたのであるが，ここにその後のアメリカの文化社会学の温床ともいえるものがあると，私は思う。

〔注〕

(1) その影響および果した役割に関しては，次の論文がある。
佐々木徹郎「四つの願望理論について」社会学研究，第6巻 pp16～24
拙稿「四つの願望理論」関西学院大学院論叢 No 1. 1967. pp 53～62
F. H. House "The Concept ,Social Forces' in American Sociology", American Journal of Sociology vol 31. 1925

(2) E. H. Volkart, "Social Behavior and Personality, Contribution of W. I. Thomas to Theory and Social Research" p 112

(3) Ibid., p 13

(4) H. Blumer, "Critiques of research in ths Social Science I, An Appraisal of Thomas and Znaniekis' "The Polish peasant in Europe and America, "p p191～192

(5) W. I. Thomas, "The Polish Peasant in Europe and America" pp72～73

(6) 気質というのは，各人が生れながらにしてもつ生来的「本能的」な態度のすべてを意味するものであり，性質というのは，この気質にもとづいて経験を通して作りあげられた態度を意味する。Ibid., vol 2. pp 1842—1847

(7) Ibid., vol 2. pp 1158, 1197

(8) この「態度，価値」の二分法的構図から，宇賀博はこれを Parsons の「行為者—状況」図式に相互させているが，仲々興味深いものである。

(9) 佐々木徹郎「前掲論文」p 19

(10) W• I• Thomas "The Unadjusted Girl" p 4

(11) Ibid., pp 4～11

(12) Ibid., p 12

(13) Ibid., pp 17～30

(14) Ibid., pP 31

(15) Ibid., pp 32

(16) 佐々木徹郎「前掲論文」p 17

(17) K• Young "Social Psychology" in "The History and Prospects of ths Social Sciences "by (ed) H• E• Barnes 米村富男訳「社会心理学」p 82

(18) H• Blumer, Ibid., p 132

(19) 佐々木徹郎「前掲書」p 89

(20) F• Znaniecki "William I Thomas as a Collaborator" Sociology and Social Research, vol 32. p 767「第一次集団への個人の参加を動機づける，四つの主要な欲求の理論を，我々が（多分彼の主導権のもとであったと信ずる）公式化したすぐあとで，タマスは突然，当時アメリカに於けるフロイドの追随者によって呼ばれていた，フロイド派の欲求に関心をもつにいたった。彼はリビドーは受け入れなかったが，欲求，desires を願望 wish にかえて，いく分かフロイド分析に似た方法で，不適応のパースナリティの分析に『四つの願望』を応用した。」

(21) K• Young, 米林富男訳「前掲書」p 32

(22) E• W• Burgess „The Influence of Sigmond Freud upon Sociology in The United States" American Jonrnal of Sociclogy vol 45, pp 356～374

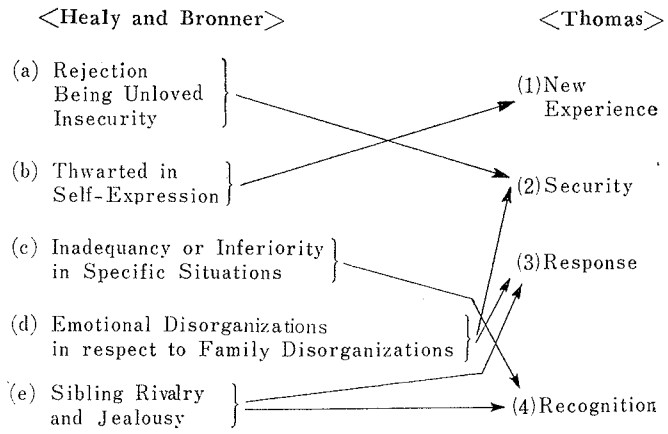
(23) この願望理論とアメリカ社会学の主要な概念である「社会力」理論との関係も，学説史研究においては非常に重要なものであるが，それについては修士論文において検討したので，ここでは省略する。

(24) 佐々木徹郎「前掲論文」pp19—20

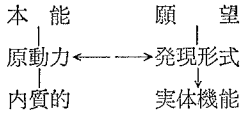
(25) 佐々木徹郎「米国社会学と教育」p 227

(26) Herbert A• Bloch "Disorganization personal and social" p209

Emotional States Occurring in Conjunction with Delinquent Behavior



(27) 佐々木徹郎「前掲論文」pp21—22
(28) 前掲論文 P 22
(29) 次図の如くなる



Ⅲ　タマスの社会学方法論

1.　状況の規定アプローチ

タマスの著作のうちで，もっとも重要なものは第三期の代表的研究「欧米におけるポーランド農民」といわれる。すなわち，タマスの思想的発展の第三期は，彼の社会学的概念の発展期ともいえる。それ以前においても，タマスは社会過程，社会行動を論じてはいるが，その方法論は社会学的というよりはむしろ社会心理学的といった方がいい。そしてタマスがその社会学方法論を明確に展開したのは「ポーランド農民」においてである。彼がこの方法論の問題を明確な形で表現するにいたったことには，その著の共著者であるズナニエッキ F. Znaniecki の影響が大きいと思われる。バーンズは，彼を主として「飜訳者の役割」と規定しているが，(1)　それは誤りであり，タマスの重要な概念とされている「態度・価値」二元論(2)　への貢献，特に，「価値」概念の導入が挙げられる。

さて，タマスの社会学的方法論は「ポーランド農民」第一巻の冒頭，約90頁からなる「方法論的覚書」の中に展開されている。(3)　この中には，「態度・価値」二元論，社会科学論，社会過程論，社会法則論，等々が含まれている。これ以外にも幾つかの重要なものを提出している。その内で特に重要なものは，次の三つであると思う。(1)研究室実験 laboratory experimentation，(2)状況の規定，(3)四つの願望理論。四つの願望理論は前章でとりあげたので，ここではふれない。

先づ第一のものは，実験結果なくしては決して十分に検証出来たとは言えない，という明白な論理的主張である。この方法論的論点は，J・S・ミルをはじめとする他の19世紀のパイオニア達によって，しばしば論義されてきたものである。これをタマスは再検討している。すなわち，彼は，科学者が研究室実験に依存する程度を指摘し，研究室実験は，二つの主たる点において実践的な適用の場合とは異なると主張する。先づ第一に，通常の研究室実験は多くの点で非常に単純化される。換言すれば，実験者はその人に直接に関係しない全ての変数を排除する。第二に，研究室においては，失敗の結果は極少化されうる。しかるに，現実の社会実験の場合には，いかなる失敗も禁ぜられる。タマスによれば，もし関係者に害的影響があると予測される場合には，どんなに小さい社会的実験でも，単にある知識を獲得するためにのみ許されるべきではないとしている。

「さて，全てのいわゆる社会実験においては，いかにスケールが小さかろうとも，実験的価値に

ついての疑問が含まれる。なんとなれば，これらの実験の対象は人であるからである。社会科学者は，それらの実験によって影響される人々の未来に，彼の実験を課することの疑問を排除出来ない。それ故に，彼は自らの理論を証明するために，失敗の危険をおかすことを決して正当化出来ない。」(4)

更に，タマスは，社会科学者の実験は，恩恵のチャンスが害のチャンスより大きいと確信出来る場合にのみ正当化されうるとし，そのためには，先づその理論や一般化を完成すべきであると主張する。そして，その理論完成のためには，次の三点が特に考慮される必要があるという。第一に，一定の法則や関係に到達するためには比較法 Comperative Method がとり入れられるべきであること。第二に，「あらかじめ，ある特定の事実群を恣意的に選択しないで，所与の社会における全体の生活を考慮する必要がある。」(5)　こと。第三に，たとえ一般化が得られても，それと全く正反対の実験について体系的な研究をするとか，かかる矛盾が単にうわべだけのものであって，じつは他の諸要素の影響によること，などをはっきりさせるまでは十分なものではない。すなわち，社会理論では，実験的にテスト出来ぬ故，社会科学者による反対の事例の積極的な研究にまつ他ない，ということである。この三点は，ブルーマーも指摘するごとく，(6)　非常に重要なものである。特に第三の点は，社会生活の研究には実験的方法は不適当である，というむしろ警告であるといってもよい。そして，ここから，実験に代るものとして，「状況の規定」の概念を提出している。

タマスは，研究の科学性は究極には「現実への適用性」にあると考えた。(7)　しかしながら，法則というのは元来抽象的であり，現実の状況は具体的である。それ故に，科学的な法則の適用は非常に困難となる。すなわち，社会実践においては，利用したり改善したいと思う諸要素が，われわれの行動が従わなければならない状況に常に具現する。従って，個人の態度や社会制度の修正を欲すると否とにかかわらず，まづもって，その状況を検討することが必要になってくる。そこで，タマスは，状況には次の三種類の資料が含まれていることを指摘する。

「(1)個人ないし社会がそのもとで行動する客観的条件 objective condition，すなわち，一定の時において，直接にであれ間接にであれ，個人ないしは集団の意識状態に影響を与える価値――経済的，社会的，宗教的，知的などの諸価値――の総体。(2)一定の時において，個人ないしは集団の行動の上に実際的な影響をもつところの既存の態度 pre-existing attitude。(3) 状況の規定 definition of the situation，すなわち，態度の条件とか，態度にともなう意識についての多少とも明確な知覚，がそれである。」(8)

「ポーランド農民」においては，これらの要素のうちの第二ものが強調されている。というのは，タマスは，この書執筆中には，因果的諸関係は態度と価値の間にうち立てられると信じていたからである。たしかに，この概念は社会的価値や態度の公式化において，幾分ルーズな理論に，より理論的精密さを与えているが，やはり先に述べた実践的欠陥を完全にみたしているとは，私には

思えない。

この「状況の規定」という有名な概念は，タマスが，これ以後の彼の研究において中心的位置をおいた概念である。これが完成したのは，1928年の「アメリカの子供」(The Child in America)であり，タマスの最後の著書「原始人の行動」において，パーソナリティと人間行動は文化によって規定されていることを示した時の中心概念が，この「状況の規定」アプローチである。R・マートンは，この概念をやや誇張的に，ニュートンの定理にも比すべきものと評価し，[9] A・ボスコフは，この概念による分析は，M・ウエーバーの「理解」verstehen の概念に，非常に関連するものとして高く評価している。[10] また，宇賀博は，パースンズ理論の基本図式である「行為者―状況」図式が，基本的には，タマスとG・H・ミードの総合図式の形で展開されていることを指摘している。その中で，パースンズの「行為者―状況」図式と「ポーランド農民」の考え方を比較考察し，パースンズのこの図式を，タマス＝ズナニエッキ的図式とよんでも差支えないとまで述べさせている。[11]

2. パースナリティ理論

タマスはパースナリティのダイナミックな側面に関心を向けている。そしてそれを，彼が気質的態度 temperamental attitude とよぶ基礎的態度群を，個人は所有して生れると仮定することによって処理している。彼によると，これらの気質的態度は外的な社会的影響によって働きかけられ，彼が性格態度 character attitude とよぶところのものになる。これらが，個人が外界と直面する一連の組織された態度群である。気質的態度が性格態度に変るプロセスを，タマスは個人の生活組織 life organization と名づけている。しかし，ここで問題になるのは，タマスがその移行様式に，「生活組織」という名前を与えながら，性格に変るためにはどのような力が個人の気質に作用するかを説明していない点である。

タマスは，いかに性格は特別な社会的価値から生じるかを説明するために，「状況の規定」概念を再提出している。実際，性格と気質の間の相違は，気質態度が状況を規定できなくて，単に状況への本能的反応を生じるだけである，という点にある。このことは，個人における状況を規定するための能力はその性格態度のより早い発達を仮定することから出てくることになる。

タマスはまた，パースナリティのタイポロジーを提出している。彼は人間のパースナリティを，「ペリシテ人型」the philistine type，「ボヘミヤ人型」the bohemian type，「創造人型」the creative individual type の三類型に分類している。

先づ「ペリシテ人型」は頑冥不霊で伝統的形式を固持する，すなわち，新しい態度をとることが出来ないというような厳格な信念や価値をもった人々である。その結果，このタイプの人は，自分自身の行動や行為を諸規則に依存する。それ故に，探求的なタイプではない。ただ思考において精密である。そして，このタイプの人は自からが認識できる何らかの状況にいかに適応させるかを知

っている。一方，「ボヘミア人型」は，社会規範の内面化が極めて弱く，その結果あたかも「風に摩ぐ葦」のたとえのように，社会的諸状況に対して反応過剰となる。すなわち，このタイプの人はその性格が決して完全に形成されない人である。それ故に，彼の性格態度は首尾一貫した体系に決して動かされない。最後に，「創造人型」は，自らの置かれている社会的秩序に対して進歩的で可塑的な，かつ責任のある関係をかちとるタイプである。このタイプの人は，タマスによると，最も理想とされる型である。このタイプの人は自分自身の内に体系的拡大の可能性をもっている。そして，この可能性を一定の目的の追求に利用する。彼の目的の恒久性は，彼に体験を累積せしめ，かつ，彼の状況への適応こそが彼の一生涯の発展を促進せしめる。

このタイポロジーは，変動の研究にとって極めて示唆深きものであり，経験的にも論理的にも，適切のように思える。これらは，タマスの世界についての深い，かつ体験された知識の形跡を示すものであるといえる。更に，このタイポロジーは，社会学及び社会心理学のその後の発展に大なる影響を与えた。特に，後のパーソナリティ論に大きな影響を及ぼした。(12) リースマンの理論には，その影響が顕著にみられる。彼は人間文書の利用方法について検討しているが，ここにも，ヴェブレンと共に，タマスが影響をなしていることを示している。

キンボール・ヤングは，パースナリティの社会的相互作用理論の形式に貢献した研究者として，J・M・ボールドウィン，C・H・クーリー，J・デューイ，G・H・ミード，そしてタマスをあげている。ヤングによると，ボールドウィン，ミードの二人は，相互作用における自己・自我の発生に関して貢献しており，デューイ，ミードは思考や知識自体の本質的な社会的，文化的性質を指摘した点にあるとしている。そして，タマスについては，次の如く述べている。

「彼は個人の発展における社会的，文化的要因に最初から注意を向けていた。……彼は後に，"situational approach" と呼ぶものに注意を移行した。それは，個人と社会的状況のコンスタントな相互作用を強調したものである。」

3. 社会解体理論

タマスの提出したもう一つの重要な社会理論は，社会解体と社会再組織 social disorganization and reorganization の過程に関するものである。これは，後の社会解体論に多大の貢献をなしたものである。ドン・マルティンデールはタマスの現代社会学への貢献として次の四項目をあげている。

(1) a typology of motivational cotegories
(2) the concept of life organization and social organization
(3) a typology of individual life-organization
(4) special concepts of personal and social disorganization

そして特に(4)の重要性を指摘している。(14) また，マルティンデールとならんでアメリカ社会学

史の著名な研究家であるN・ハウスも，タマスが社会解体をとり扱うことによって，文化及び社会組織の理論に重要な貢献をなしたとみている。(15)

ハウスによると，アメリカにおける社会学思想及び研究の起源は，大部分，社会問題または病理的なものとして通常考えられる社会生活の諸局面を探求する試みへの貢献という努力にあるという。その場合，社会病理学的社会現象を客観的に規定する点に，非常な難しさが存在する。そして，研究者は，社会が是認しない人間行動の形態すべてを，換言すれば，われわれがわれわれ自身に同一視する集団のモレスに一致しないようなものを，アブノーマルまたは病理的なものとして規定する傾向をもっていた。この方法論的問題についての種々の検討が，20世紀初頭のアメリカ社会学者によって試みられた。それらの内で，もっとも多くの学者によってとられた見解は，諸個人がなんらかの形で，彼等の基礎的欲求のハケ口または表現することを妨げられているような社会の個々の成員の行動や社会的条件を，アブノーマルまたは病理的なものとして見なすというものである。しかしながら，社会的アブノーマリティのこの基準が，いかなる程度の客観性をもって使用されうるものであるかという疑問は解明されなかった。社会問題に関する多くの研究家達は，誰でもが望ましくない，それ故にアブノーマルであると誰でもが承認するであろうと仮定された既存の社会的条件を列挙することから社会問題の論義をはじめることによって，そのような疑問をさけた。このディレンマにおいて，タマスは，アブノーマルなものとして通常みなされる社会的条件の研究に，明白に適切な新しい概念，すなわち，「社会解体」の概念をもって登場したといえる。(16)

第一義的には，タマスは，「社会解体」を，「集団の個々の成員への，行動の有する既存の社会的規則の影響の減退」として規定した。すなわち，社会解体は，社会の全成員によって認識され受け入れられた，そしてあらゆる遇然の事件における情状を規定せんとするものである。そして，「何がなされるべきか」，「どのような態度がとられるべきか」等々を規定した社会規則，習慣，伝統または評価の相対的欠如によって特徴づけられる社会における affair の状態である，とタマスは規定する。この規定より，ハウスは，この概念がアブノーマルな，病理的な，または不適応なものとして注意をひくあらゆる範囲の社会現象を研究することを可能ならしめる見解を与えるものだという点を示していると強調する。(17)

「ポーランド農民」の場合，タマスは，ポーランド農民社会の伝統的規則が破壊されていく過程に，四つの新しい態度を見出している。その態度変化の第一のものは，個人主義化の成長である。すなわちポーランドにおいて持続してきた家族体系から，各人が職業をもち，個人的利害関係を探究するという体系への解体である。第二の態度変化は，快楽主義の成長である。すなわち，快楽のために行動し，快楽の目的を達成するために金を使うということが本来のものであるという考えへの変化，換言すれば既存の価値観の解体である。第三の傾向は，成功探究 success seeking の増大である。第四の傾向は，タマスが「質的」価値と呼ぶものから「量的」価値と呼ぶものへの全価値の転換 transformation of all values であった。タマスは，人々が，この態度変化ととも

に，事物が美しく作られるかどうかという考えをすてて，それが市場でよく売れるかどうかを考えはじめたと述べている。

ポーランドにとどまっている農民の場合には，タマスは，これらの態度変化を次の三点に帰する。すなわち，(1)全経済の増大する個人主義化，(2)村がもはや孤立化を果せず，それとともに都市の価値観を身につけた商人によって訪問されるという事実，(3)コミュニケーションの進歩，そして，タマスはこれらのものが，ポーランド農民における古い家族体系を解体していると解釈している。

また，移民したポーランド農民に関しては，変動の理由はより明白である。すなわち，移民は古い価値観，またはわずかに修正された古い価値観を伴って移住してくる。そして，新しい一連の規則，アメリカ社会の規則の中でそれらを適応せんとする。ここで再び態度と価値の間の調和の葛藤と欠如が生じ，それが社会解体に導くといえる。そしてタマスは，新たな態度のために制度化された表示の発達のみが，社会再組織化の局面に入ることを可能ならしめると結論している。

ブルーマーが指摘する如く，この理論は，タマスが引用した資料からだけでは出てこないことも明白である。しかし，人間文書という資料から引き出していないとしても，この理論が歴史的分析に適合している点は否定出来ない。ハウスも強調するごとく，この概念は，それまで社会病理的なものとしてみなされ，しかし主観的傾向の限界内でのみ説明されてきた諸現象についての我々の知識を統一し，具体化し，機能化する役目を果した[18]　そこにタマスの「社会解体」理論の現代社会学への重大な貢献があると思う。

4. 人間文書 human document

「ポーランド農民」に関しては，英文だけで約30の書評がなされた。たとえば F・House,A・W・Small, H・P・Fairchild, E・Faris, S・Bluhm, E・G・Bolch, L・Wirth, H・E・Barnes, K・Young, N・S・Timascheff, J・Madge 等アメリカの代表的社会学者が，A・J・S, Nation, Sociology and Social Research などにおいて，書評を記している。しかし，何といっても，これらの内で一番重要なものは，ブルーマーの批判である。すなわち，「ポーランド農民」第一版の出版後20年を経て，社会科学研究会議 Social Science Research Council では，その最初の企画として，シカゴ大学のブルーマー教授に「ポーランド農民」の批判検討を依頼した。1938年この問題についてさらに特別の会議が開かれ，ブルーマー，タマス，G・W・オールポート，R・ベイン，F・W・コーサー，M・レルナー，G・P・マードック，L・ワース，D・ヤングをはじめとする16名の社会学者がこれに招かれた。そしてその会議の結果は，社会科学研究会議の最初の書物として出版された。それが有名な "Critiques Research in the Social Sciences : I. An Appraisal of Thomas and Znaniechis' The Polish Peasant in Europe and America" である。

ブルーマーは，まずタマスのこの書物における目的を，次の四点にあったとみている。(1) 複雑な，かつ変動する社会環境に適合する概念図式をつくり出すこと，(2)人間の相互作用の事実と影響を考慮した分析をなすこと，(3) 主観的要因をとらえること，(4) 適切な理論的枠組をうち立てること。そして，「ポーランド農民」の全体的評価として，ブルーマーは次の四つの結論に到達している。

第一の結論は，用いられた資料が方法論的図式に，適切に相関されなかったことである。第二の批判は，人間文書がいかなる種類の諸理論の確証にも適合しえないものであるという点である。この批判においてブルーマーは，理論の確証のために，人間文書をタマスが選択した点を明白に批判している。[19]

第三の批判において，人間文書は理論の確証には役に立たないが，予感，洞察，反省のための適切な問題，新しいパースペクティブ，新しい理解を提示する貴重な資源であると主張する。[20] その理由として，この種の資料のもつ一つの困難な点は，資料の複雑さが，厳密な分析よりも，むしろ複雑な解釈を要求する点にあるからとする。[21] そこで，ブルーマーは，有効な解釈は，研究者の「体験，知性，熟練した質問」に依存することを，第四の結論としている。[22]

ブルーマーの批判の中心となっているものは，「ポーランド農民」において，資料がタマスの主張とは異なり，一般的法則を得るための帰納的資料として使用されていないという点であろう。この点は，調査研究という立場からは，もっとも重大なものであるが，タマスも後にはこれを是認している。[23]

そこで，ブルーマーの批判の中心になっている「人間文書」使用におけるタマスの考え方，これは，タマスの社会学方法論として最も重大なものであるので，この項において検討してみたい。

タマスの「人間文書」使用についての考え方を検討する際にどうしても見逃すことの出来ないものは，先に検討した「状況の規定」概念との関連である。そこで，再度，彼の「状況の規定」概念をみてみよう。

タマスが「状況の規定」の概念を考えたのは，社会と個人との相互的関連を明らかにするための手段としてである。「状況の規定」は，個人の層においては状況についての主観的観方であり，個人の解釈である。タマスは，次の様に述べて，この概念が人間の行動を理解する時のもっとも重要なものであることを示している。

「状況についての主観者の観点，すなわち，いかにそれを彼がみなすかということは解釈にとってもっとも重要な点である。というのは，人の行動は，客観的現実に関してであれ，また主観的評価——あたかもそう見える——に関してであれ，彼の状況の規定に密接に関連しているのである。同じ事実でも，問題となる行動を起す人間に見える状況と，他人に見える状況との間に大きな相違が存在するのは，しばしばである。それゆえに，もし人が状況を事実であると規定すれば，それは結果において事実である。」[24]

そして，更に，個人は客観的状況に反応して行動するのではなく，自分の判断した状況に応じて行動するが故に，タマスは「個人の行動の予測には，個人の判断を調べる手掛りが必要であり，これは人間文書によって得ることが出来る」(25) と結論している。

一般に，科学においては，主的観要因は処理不可能であり，また主観的なものを含む資料は，研究の資料としては不適切なものと考えられていた。この意味で，主観的なものを含んでいる点に人間文書の科学的資料としての欠陥があると考えられている。しかし，タマスにとっては，主観的判断を含むが故に，人間文書が資料としての価値をもつとみているのである。更に，タマスは，人間文書のもつ他の長所として，それが人間の行動におよぼす文化，社会制度の影響を，継続的に，かつその発展的様相において表現している点にあるとしている。すなわち，タマスは，個人におよぼす社会，文化の影響に，個人の人格が行動を通じて把握されうると考えた。ここに人間文書が大きな意味をもってくる。彼は，「不適応少女」において，次の如く指摘している。

「制度は，個人のパースナリティ発達にてらして研究されるべきである。またわれわれが，欲求が表現しようとする手段および欲求の通常の満足の条件を示す個人の進化の記録を集めるならば，特定の制度が個人の性格および『生活組識』の形成におよぼす影響を測定し，制度とそれ自体の変化の系列を決定できるためのよりよき立場に立つことになろう。」(26)

そして，この際，もっとも秀れた資料を提供するものが人間文書であると，タマスは主張する。そこで，タマスは種々の人間文書をあげている。先づ論文「民族心理学」においては，意図的文書と非意図的文書，個人および面接による記録の三種類の研究資料をあげ，意図的文書を欺瞞的であるとして低く評価している。また面接の場合，人は往々真実を隠して語るゆえ，面接の結果は他の方法でもって補正されなければならないとみている。(27) 彼は歴史，民俗史，民話等を意図的文書とし，手紙，日記，新聞，法廷記録，教会およびクラブの記録，演説，学校カリキュラム，年鑑等を非意図文書としてあげている。「ポーランド農民」における尨大な資料のうちで，もっとも大きな資料源は55組，754通からなる手紙の蒐集であり，およそ800ページを占めている。これらの手紙は，移民者への手紙とアメリカの移民者からの手紙とである。資料の第二番目のものは，ポーランドの新聞 Gazete Zwiazkowy の記録所からのものである。その他，いくつかの資料が人間文書として採用されているが，「ポーランド農民」においてもっとも有名な資料は，若いポーランド人 Wladek Wisznienski の生活史である。Wladek はこれを書くほんの少し前迄ポーランドに住んでいた。その書かれたものは，ポーランドにおける彼の体験である。ただ，Wladek が書いたことの真実性についてはかなりの疑問がある。最大の疑問は，「彼は正直であったか」という点である。この点についてタマスが有効性を示すと考える唯一のものは，Wladek が彼の家族によって彼に送られた幾つかの手紙を提出し，タマスによって，その生活史の中の事実が手紙によって確証されたということである。しかし何通の手紙があったかは明白にされていない。わずかのものだけが生活史に付されている。これだけでは全ストーリーを確証するには十分でないと思う。生活史は，

タマスの社会心理学的理論，特に彼の「四つの願望理論」を説明するために用いられているといってもよい。しかし，Wladek の生活史が，ポーランド人の典型的行動や一般的背景についてよりも，彼のパーソナリティについてより多くを示している。ただ Wladek の生活史が，初版では3巻目におかれていたのが，第2版では一番最後におかれている。このことは，マッジも指摘するように，タマスの側のある程度の不確かさをも示しているのではなかろうか。

タマスが人間文書を用いて分析した書物として，「不適応少女」がある。彼は，この書物においては，新聞に掲載された手紙，少女保護機関の記録，少女の自叙伝等を使用した。これらを通じて，タマスが人間文書としてもっとも重要視したのは，非意図的文書である。彼は，「ポーランド農民」において，人間文書が社会学における分析，法則樹立にとって最良の，かつ完全な資料であることを，次の如く指摘する。

「個人の経験および態度を分析するにあたって，われわれが常に手に入れている資料または基本的な事実は，単にこの個人のパースナリティにのみ制限されるのではなく，多かれ少かれ，一般的クラスの資料または事実の単なる一例としてたどり得るものであり，そして生成の法則を決定するために使用出来るものである。社会学的分析の使用を，われわれが具体的な個人の詳細な人生記録に求めようが，また大量現象の観察に求めようが，社会学的分析の問題には変りはない。たとえわれわれが抽象的法則を求める場合においてさえ，具体的個人の人生記録は，他のいかなる種類の資料に比しても目立ってすぐれている。われわれは，できるだけ完全な個人の人生記録は，社会学的資料として完全なものを構成すると考える。さらに，社会学が他の資料をも使用しなければならないとしたならば，それは，その時において，社会学的問題の全体を覆うに充分な数の記録をうることが困難であり，社会集団の生活を特色づける必要な全ての個人資料の適切な分析には，莫大な作業が要求されるからであるといってもいい。もしわれわれが，資料としてそれに参加した個人の人生記録に関係なしに，大量現象，その他いかなる現象でも使用しなければならないというのは，われわれの現在の社会学的方法の利点ではなく，欠陥である。」[28]

この長文をここに掲げたのは，この部分こそ，タマスが人間文書の効用を述べつくした個所であり，社会調査における人間文書批判への挑戦であるからである。

これに対して，ブルーマーは，人間文書による方法は，主観的要因の研究にとっては論理的に適切ではあるが，果してこれが科学の資料たりうるかどうかという点に疑問を持つ。すなわち，人間文書が，タマスの主張とは反対に，社会生成の法則を帰納するための資料として，使用されていないと批判する。それゆえに，ブルーマーは，人間文書は一般原理をテストし，それを帰納する資料としては不充分なものであると断定した。しかし，ブルーマーは，人間文書は一定の事象の解釈の資料として使用する場合，事象について，われわれにより深い理解を与え，その理論的分析をより容易ならしめるがゆえに，その点に，人間文書の効用が存在するとした。すなわち，人間文書は単に理論の例証のみに役立つものではないが，しかし，理論そのものを導き出すには不充分であると

いうことである。さらに，ブルーマーは，先に述べたように人間文書の三大批判点を指摘している。しかし，彼は，人間文書を人間生活の科学的研究から除くことは，「致命的大失策」を犯すことになるとも述べている。すなわち，ブルーマーは，文化の主観的面の研究にとって，人間文書は必要欠くべからざるものではあるが，一般化的認識の資料としては，人間文書の方法には，今の所克服しがたい困難があることを指摘し，これを「社会調査のジレンマ」であるとよんでいる。(27)

タマスは，かかるブルーマーの批判に対して，「ポーランド農民」における一般原理が，資料としての人間文書から導き出されたものでないことを認めたけれども，これが人間文書に内在する性質から由来すると考えず，「概念主義」によるものであると考えた。すなわち，タマスはここで有名な "point by point procedure" について述べている。

まずタマスは，調査に入る前に方法論義によって操作の枠を固定してしまうことは無益なことだと主張する。そこで，タマスによると，まず一段階毎に目標を立て，それに必要な方法を適用してみる。さらに，その結果に基づいて再び目的を設定し，また新しい方法を案出する。このプロセスが，タマスのいう "point by point procedure" であり，このプロセスにおいてこそ，方法の進歩があるとみた。それゆえに，人間の種々の経験および社会制度に関連しての行動反応を示す莫大な量の人生記録を手に入れたら，一体いかなる結果が生れるであろうかということが研究を指導する態度であるべきであると，タマスは主張した。(30)

社会科学者研究会議に出席した学者の一般的結論も，ブルーマーの批判と同じく，人間文書は一般化的認識の資料としては不充分であるというものであった。ただ人間文書が個別化的認識については，重要な意味をもつことが認識された。そして，タマスが主張するように，人間文書は他の資料に比べて，人間行動についてより現実的な，より明確な解釈を与えることは疑いないことである。ブルーマーが，これを人間文書のもつ最上の機能であると考えたのも当然であるといえる。ケース・スタディといわれる場合に，個別化的認識が意味されていること，さらにケース・スタディの中心をなす資料が，個人観察等の記録を含む人間文書であることが，このことを証明している。

このような個人的人間文書を用いて社会学的問題を論ずる仕方は，したがってまた，非行（Shaw, Case-study method, in publications of the American Sociological Society, XXI. 1927），犯罪（Park, *M*urder and the case-study method, in American Journal of Sociology, t, XXXVI, 1930; Sutherland, Tbe Professinal Thief, 1937），自殺（Cavan, Suicide, 1928），失業（Komorovsky, The unemployed Man and his family,1940），戦争の家族への影響（Burgess, The Family and the person, in Publications of American Sociological Society, t, XXll, 1928），経済的危機の家族への影響（Angell, The Family, in the U. S., 1939）にも適用されたし，さらに家族そのものものにも，（Frazier, The Negro Family in the U. S., 1939），夫婦和合にも（Mourer, Personality adjustment and domestic discord, 1935），宗教への社会事実の作用にも（Holt, Case records as data for studing the

conditioning of religious experience by social factions,in Publications of the American Sociological Society, t, XXXll, 1926) 適用された。[31] また，ズナニエッキは，この方法を非常に高く評価し，みずからも生活史を集めて調査を行なっている。またウォーラーは，学校集団における個人と個人，個人と集団との関係を研究するにあたって，この方法を利用したのである。またドラルドは，人間文書の一つである生活史の基準を，フロイドとタマスの二人の概念から引き出して，その重要性を強調している。[32]

しかし人間文書を利用する方法については種々の批判がなされている。ただブルーマーの批判は，なるほどもっともではあるが，マッジも述べているごとく，少し悲観的すぎるのではないか。ブルーマーは，体験による証明以外の証拠を受け入れないものであると指摘しているが，証拠だけが唯一の望ましい目的ではないと思う。その点をマッジも，次の如く述べている。

「もし，レポートが，読者に，その結果の真実性を確信させ，さらにそれがその疑問とした点に新しい光を投げかけるならば，たとえ証拠が未だ未達成のものであるとしても，それは研究として貴重な機能を果している。」[33]

1938年のこの会議は，現代社会学に多くの貢献をなしたが，人間文書資料の適否とその使用についての疑問への検討をしたこと，さらに検討を続けることを決定したことも，その一つにあげてよい。特に，社会科学の4人のオーソリティに，夫々の分野における人間文書の使用について検討させたことは特筆されてよい。

まづ1942年にオールポートは，心理学における人間文書の使用について200ページのモノグラフを提出した。このモノグラフは，人間文書が当時心理学者によって使用せられていた目的および方法についての記述として，また人間文書使用の賛否に関する議論の入念な収集として，非常に興味深いものである。このモノグラフにおいて，オールポートは人間文書資料に対する14種類の批判をとりあげて，夫々に反論を加えている。しかし，そのうち一つだけは，彼も反論しきれなかったものがある。それは，「人間文書を解釈して意味づける作業が，書く人や解説者によって恣意的に行われたり，あらかじめ決められていたりする」[34] 点に関する批判である。すなわち，解釈の必然性に関する問題であると思う。オールポートは，人間文書に対する解釈が，しばしば，その材料に対して適用しうる数多くの解釈のうちの一つであるにすぎないと述べている。しかし，この批判は数量的資料の場合にもあてはまるのではないだろうか。すなわち，これは，人間が調査を行う場合の必然的な欠点であると思う。そして問題は，唯一の解釈であるかどうかではなくて，それぞれの研究目的に応じて妥当な解釈であるかどうかにある，ということになる。それゆえに，オールポートもまた人間文書の使用を是認して，次の如く結論しているが，当を得たものである。

「科学は何を目的とするか，その答は，科学は常識によって達成することが出来る以上のものについての理解，予見力，統制力を人間に与えることを目的としているように思える。もしわれわれが，科学的方法が何であらねばならないかに関して先入見を排し，しっかりと心の中でこの三つの

科学的目標を固定するならば，われわれは，人間文書による研究は，疑いなく科学の中にその位置をもつことを結論する。」(35)

1945年に，社会科学研究会議は残り3人のオーソリティからモノグラフを一巻に集めて，それを発行した。ゴットシャーク Gottschalk は "The Histrian and the Historical Document" において，いかにうまく人間文書が歴史編集において定着されているかを示した。またクラックホーン Kluckhohn は，"The Personal Document in Anthropological Science" において，人類学分野の研究者の方法の多くが，人間的歴史資料 personal-history material を記述することをいかに必要とするかを強調している。最後にエンジェル Angell は "A Critical Review of the Development of the Personal Document Method in Sociology 1920-40" を提出した。その核心は，人間文書を使用したこれら20年間の社会学的研究についての記述である。(36)

私は，これら三つの論文の内で，エンジェルの論文がもっとも人間文書の科学的機能に注意を向けているように思う。彼は科学的プロセスにおいて人間文書が有用である種々の点を指摘している。すなわち，概念の集塊の獲得，新しい仮説の公式化，仮説の検証とそれらが公式化されることによる概念図式との一致，人間文書は管理的決定が究極には依存する事実を与えることが出来ること，そして人間文書は科学的抽象のコミュニケーションを促進するべく例証的に用いられることが可能なこと，等々。

エンジェルは，仮説証明のために人間文書を用いることの可能性について，ブルーマほど厳格でないように私には思える。エンジェルがタマスを批判しているのはその点ではなくて，むしろ，タマスによる資料の誤用――資料選択をランダムになすことの失敗（サンプルの代表性の問題であると思うが），仮説を操作的精密さをもって述べることの誤り，タマスがその結論を基礎づけたあらゆる証拠を提出しなかった点――という点である。そして，エンジェルは，タマスがこのような人間文書の誤用を犯しているが，少しも人間文書それ自体のもつ価値は低く評価さるべきではないことを強調している。

「ある概念の有用性の決定的証拠といえるようなものは，多分存在しないであろう。長期的にわたる調査結果の蓄積だけが，現実へのある傾向またはアプローチが意味深き理論を生じるかどうかを，示すことが出来る。人間文書は，科学的体験のこの段階的基礎において，それらの役割をはたすだろう。しかし，いかなる研究も決して確実なものであると予期されることが出来ない。」(37)

私も，人間文書の役割はこの点に限定せられるべきだと思う。そして更に，現実の調査には，次のようなものが合せて行われるべきであろう。すなわち，記録がコントロールされること，研究の技術が必要であること。そしてこれ以外に，統計的方法や，解釈と仮設の構成による資料の厳選によって補われることが特に必要であると思う。これらの必要を満した人間文書の使用において，これからの調査はなされるべきであり，そこにおいてはじめて，タマスの人間文書調査が現代社会学に貢献することになると思う。

〔注〕

(1) H•E•Barnes "An Introduction of the History of Sociology", P 797

(2) タマスの社会学方法論として先づ取りあげなければならないのは，「態度一価値」の二元論，そしてこの二元論にもとづく社会科学論，および社会科学における因果法則の問題等がある。しかし，これらについては佐々木徹郎氏が次の論文にて詳細に検討しているので，ここでは省略する。
「ウィリアム・タマスの社会学方法論」社会学研究，第4号，PP 11～24

(3) この「方法論的覚書」Methodological Note を，私は修士論文「タマス研究」の副論文として飜訳しているが，200字詰原稿用紙にして約330枚の長文である。

(4) W• I• Thomas, "The Polish Peasant in Europe and America", PP 64～65

(5) Ibid., P 18

(6) H• Blumer, Ibid., P 14

(7) 佐々木徹郎氏は，この点について次のように書いている。
「社会科学は社会実践に奉仕しなければならないということは，タマスの学問についての不変の信条の一つをなしている。」
(「ウィリアム・タマスの社会学方法論」社会学研究，第4号，P 17)

(8) W• I• Thomas., Ibid., P 68

(9) R• K• Merton, Social Theory and Social Structure" P 179

(10) A• Boskoff, ''Modern Sociological Theory in contintity and change" (ed) H• Becker and A• Boskoff, P 27

(11) 宇賀博「『行為者一状況』図式に関する研究ノート」ソシオロジ21, 1959, No4 , PP 26—40

	主体VS客体の範時		社会相互作用の影響
タマスとズナニエッキ	1. 態　度	2. 価　値	3. 状況の規定 (四つの願望)
パ　ー　ス　ン　ズ	1. 行為者	2. 状　況	3.行為者の状況への志向 (型相変数)

(12) K• ヤングが，パースナリティの社会学的型の分類例を，次のごとくあげている。
(i) アリストテレス flatterer, boor, coward
(ii) Thomas, Philistine, Bohemian, creative individual
(iii) Spranger, 理論人，経済人，社会人，政治的な人，審美人，宗教人
(iv) Murray, 理論家，人道主義者，感覚論者，実践的行為者
(v) Lasswell, the administrator, the boss Diplomat, Agitator, Theorest,
そして，バージェスの "Social type" と "Personality type" との区別の重要性を指摘している。
(K•Young "Personality and Problems of adjustment" pp240—244)

(13) Ibid., p 287

(14) Don Martindale, "Social Disorgonization : The Concepts of Normative and Empirical Approaches" in Modern Sociological Theory in continuity and change, by H• Becker and A• Boskoff (ed) p 347

(15) F• N• House. Ibid., p 288

(16) Ibid., pp 288～289

(17) Ibid., p 289

(18) Ibid., p 290

(19) H• Blumer, Ibid., pp 75～77
(20) Ibid., p76
(21) J• Madge, "The Origins of Scientific Sociology" p 84
(22) H• Blumer, Ibid., p 77
(23) 「本巻の具体的な資料が，方法論的枠組と適切に結びつけられていないということは真実である。」と会議において述べている。
(24) W• I• Thomas and D• Thomas "The Child in America" p 572
(25) H• Blumer, Ibid., p 86
(26) W• I Thomas, "The Unadjusted Girl" p 250
(27) W• I• Thomas, "Race Psychology : Standpoint and Ouestionnaire, with particular reference to the Immigrant and the Negro" American Journal of Sociology, May, 1912, p 771
(28) W• I• Thomas" The Polish Peasont in Europe and America" pp 6～7
(29) H• Blumer, Ibid., p 111
(30) Ibid., pp 166～167
もっともタマスは，後には統計的方法と比較法が，人間文書の分析としては必要であることを認めた。
(31) A• Cuvillier, 野口隆訳「社会学」p 215
(32) J• Dollard, "Criterion for the Life History"
しかし，これに対しては，K・ヤングが「文化の概念は本質的なものであるのみならず，相互作用の概念もまた本質的であり，また社会的事実であることを無視している。」と批判している。
(33) J• Madge, Ibid., p 85
(34) G• W• Allport, "The Use of Personal Document in Psychological Science" p 143
(35) Ibid., p 148
(36) Louis Gottschalk, Clyde Kluckhohn and Robert C• Angell, "The Use of Personal Documents in History, Anthropology and Sociology"
(37) Ibid., p 183

Ⅳ　タマスの現代社会学への貢献

タマスの社会理論は本来探究的なものであって，後進者に解答を提供するというより，むしろ解答を見出すための道を示すというものであったと思う。換言すれば，彼の社会理論が強調するものは，その方法論でありアプローチであった。彼の主たる関心は社会の単位としての個人および社会構造と社会変動にあった。そして彼のもっとも重要な貢献は，「状況」の概念および「状況の規定」概念である。事実，彼は彼の同僚達によって「状況アプローチの父」とさえよばれている。

この「状況アプローチ」は，近代社会学の観念に充分に受け入れられてきた。例えば，社会成層を取りあつかう際にW・L・ウォーナーは，客観的諸規準のほかに，コミュニティ住民の諸意見を含んだ社会階級の規定を展開させている。また，シカゴ大学の犯罪学研究においても，このアプローチが試みられている。特に，C・ショウの研究は有名である。さらに，J・H・ボザールドは，「家族状況」(Family Situations) という彼の書物において，この「状況アプローチ」でもって

家族を研究している。

しかし，このようなタマス理論の受容にもかかわらず，彼の「状況」という概念は，私には，非常にあいまいなものにも思える。というのは，タマスの「状況」という概念は，時には，社会制度，近隣，集団または個人体験などと同義語ではないにしても，「状況」という語と上述の語との間には明確な限界がないように思う。すなわち，一つの状況が存在していても，それは続いて次の状況に没入させられていくし，またその状況が，いつ始まり，どこで終るのかを明確に解明するのは非常に困難であるからである。それゆえに，タマスの情況という術語と危機という術語の使用をみていると，時には区別がつけられないことがある。ということは，結局，彼のこれらの概念の科学的妥当性が問題であるということになろう。

同じような批判は，タマスの他の概念，たとえば態度と価値の概念規定についても妥当する。ただ，これらの諸概念のあいまいさにもっとも早く気付いたのも多分タマスだろうと思う。彼ならば，多分次のように答えたに違いない。社会科学における規定は探究される諸現象の性質に依存する。人間もまた本来，あいまいなものであり，決して明確に規定出来るものではない。それゆえに，社会科学もまた，決して明白な規定がなされるはずがないと。

タマスは諸科学の統一とか，ある状況の全体を見る等ということを強調したが，彼の理論で価値あるものとされたのは，部分的な彼の理論であって，全体ではなかった。たとえば，状況，状況の規定，態度，価値，危機，社会解体，四つの願望等の術語であり，それらはアメリカ社会学思想の一部を形成している。また彼のパースナリティ概念――態度，性質，気質――は，社会心理学の多くの学派に受け入れられている。さらに，諸々の欠点を持つにもかかわらず，タマスの「危機」という概念は社会変動を論じる場合には，非常に有効的なものとなされてきた。

以上のごとく，タマスの社会学理論は，全体として，一つのまとまった形を提示することは不可能であり，かつその部分的理論は，より検討して以後の発展を待つべきものが多かった。しかし，一応，現代社会学へのタマスの貢献を考えると，次の六点があげられるだろう。

(1) タマスは，もっとも早く進化論の教義を拒否した社会学者の一人であった。

(2) 経験的社会調査の可能性および困難さを提示したこと。この点を重要視したティマシェフは，彼を「新実証主義者」とよんでいる。

(3) 社会，文化およびそれらの変化についての説明において，いわゆる一元論理論による説明をもっとも早く反対した社会学者の一人といえる。

(4) タマスは，幾つかの重要な概念でもって，社会学理論の宝庫を豊かにした。

(5) タマスは，いわゆる統合の原理 principle of integration, すなわち，社会現象は統合文化の脈絡において検討されなければならないという主張をなした。[1] この考えは，現代の文化人類学においては，ごく当然の事と考えられているが，当時は未だそれほどこの説を主張するものはなく，タマスはこの初期の促進者の一人であったといえる。

(6) タマスは，社会理論において解決されるべき主たる問題は，個人，社会組織，文化の三者の相互依存に集中さることを主張した。これは現在でも，社会学，社会心理学，人類学においては，中心問題と考えられているものである。

これらの意義ある貢献と同時，先述したような批判すべき点も多々ある。しかし，私は，現在のアメリカ社会学の発達を考察するとき，タマスは見のがすことの出来ない偉大な社会学者の一人であると思う。佐々木氏も指摘するごとく，意識すると否とにかかわらず，タマスの考え方は，最近の社会学，社会心理学において発展させられているものが少くないように思う。

〔注〕

(1) Timascheff "Sociological Theory its nature and Growth" p 156